

# 常照

第 822 号

## 成仏道

### ② 信心の利益りやく

前回たずねたように、親鸞聖人が浄土真宗と名づけた仏教は、『仏説無量寿経』の経説に基づき、ただ一度の仏との出遇いから始まる成仏道でした。

生きた仏に出遇った感動が阿難の感得した覚りの確証であるとお釈迦さまは教えられます。この阿難の身に起こった仏との出遇いは

誰の上にも起こりません。そこから展開し、この『大経』（仏説無量寿経）が成仏道に立たしめようとした目当ては「苦悩の群萌（ぐんもう）」です。「苦悩の群萌」とは、仏教など無関心であり生活環境に翻弄されて周りを押しつけてでも自分を主張し、その中で優位に生きていこうとする人間です。つまり世間に揉まれて生きる私たちのことです。

私たちは世間の中で苦勞しながら生きていきますので、世間の道理やその中を渡る術をよく知っています。だから世間を生きる上で有効な、才能・財産・信用などを大事にするのでしよう。そして、これらの延長に人間の幸せがあるように漠然と考えています。

しかし仏から見れば私たちはこ

れしか知らないのです。むしろこれらに縛られて人間の幸せを規定し、これらを大小いくら積み上げても満たされないことで苦悩するのです。人間の根本的な苦悩は生きていく上で何が本当の幸せなのかを知らないことにあると仏は見抜いています。

そもそも人間は仏教になど興味はないのです。まして自身の成仏など問題にもなりません。しかし、そんなことは百も承知でお釈迦さまは私たちに念仏の教えを授けまします。それは世間の道理の中で人間は必ず行き詰まるからです。この行き詰まったときこそが、仏の覚りに出遇うチャンスなのです。世間で上手く立ち回っている時には仏教は聞こえてきません。だから南無阿弥陀仏の名号さえ知っ

ていれば、世間に潰れたときに、そこから仏教は開かれます。苦悩のなか南無阿弥陀仏の名号を頼りに生きた仏教に出遇うのです。阿難の見仏の体験と同じです。

我が思いを破った仏の覚りの世界に解放されるのです。見仏の体験を具体的に言えば、今まで我執によって握りしめていた善悪優劣を仏教によって手放すことができたとしたことでしょう。自ら規定した思いによって自ら苦悩していたことが身にしてみてもよく分かったということなのです。

このことを伝統的には「自力無効」(じりきむこう)とか「浄土に生まれる」とか「信心を獲(え)る」と言ってきました。この信心とは仏の覚りと同質のものでありますが、私たちは煩惱の身を死ぬ

まで抱えて生きていかなければなりませんので、お釈迦さまのように悟ってしまったとは言えませんが、しかし浄土に生まれ成仏せよという仏の本願を臆念(おくねん)し、南無阿弥陀仏の覚りと共に生きてく信心を獲得(ぎやくとく)したならば、世間の中にあっても煩惱に支配させず、その迷いから離れて出世間の法を生きるものになるということですよ。

仏教では無自覚な迷いほど深い罪はないと教えます。流転輪廻(るてんりんね)というように自ら迷い周りを巻き込んで迷わせる。自分の迷いは自分の代で断ち切らなければ子や孫の代まで迷わせることになります。この迷いの連鎖を断ち切るところに信心の利益(りやく)があります。

この仏さまに頂いた信心は、自分だけ迷いから解放されればよいというところに止まりません。成仏道に立った信心の行者には、命終わってもなお果たすべき仕事があります。

親鸞聖人の語録である『歎異抄』(たんにしやう)には「ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生(ろくどうししやう)のあいだ、いづれの業苦(ごうく)にせずめりとも、神通方便(じんずうほうべん)をもつて、まず有縁(うえん)を度すべきなり」と記されています。生きていく間は、いかに仏教を聞いていても自分の子どもには上手く伝えることはできません。しかし信心を頂いた者は、命終わって浄土に還り成仏したならば、た

だちに遺してきた子どももの元に戻り、世間で苦悩する子どもを助ける。

世間に生きる人間の苦悩は出世間の教えでなければ解決しないと南無阿弥陀仏の声となり仏教に導き続ける。

このような信念を今いたたぐところに、人として生まれ、仏教に出会い、必ず成仏する者に育てられた甲斐というものがあるのでしよう。

どうぞ一緒にお念仏申しませう。どうか南無阿彌陀佛を称えませう。



### 七月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 七月七日(木)〜十一日(月)

山口教区 美和組 超尊寺

講師 田坂 亜紀子 師

○後期 七月十三日(水)〜十六日(土)

北海道教区 空知北組 円満寺

講師 金龍之哉 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)〜

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。  
どうぞお誘い合わせ頂き、ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松二丁目四番十七号

## 本願寺小樽別院

電話 (011-34) 221074  
FAX (011-34) 291408  
テレホン法話 2711616